

## 【巻頭言】地域と共に活かされ、報われる鉄道を目指して

澤田 長二郎 Sawada Choniro

早いもので、津軽鉄道株式会社 代表取締役社長に就任してから12年になります。

当社は、全線開業してから年齢にして86歳、私が76歳と双方老齢です。折角の機会を頂きましたので、私が鉄道業に関与するに至った経緯と、今も大切にしている当時の励ましのメッセージを紹介いたします。

☆

☆

☆

2004年(平成16年)4月に46年振りに故郷、青森県五所川原市に回帰しましたが、取り敢えず一年間は無色(職)透明、サンデイ毎日の生活とし、その後はセカンドライフの選択肢の一つとして、故郷活性化のために何かできる事をしようと考えておりました。

偶々、日刊紙「東奥日報」のコラム「ティータイム」にその辺の事情等を寄稿していた時期に、ミニSL愛好者団体の(社団)日本ミニクラブ会長栗山弘氏(故人)の自主制作で、元国鉄の運転士、大石和太郎氏(東海道新幹線開業の新大阪駅発一番列車、ひかり2号を運転、高校教諭経験もあり、鉄道・船舶・飛行機の運転免許保持と聞く)が撮影の16mm映画「津軽の鉄道」を弘前で観賞する機会がありました。

私は、津軽の先人達が地方産業の発展、教育振興を願い、私財を投げ打ち、苦勞して鉄道を敷設した事に感動し、映画からの帰路に、知人でもある津軽鉄道社長、三和満氏を訪問し、映画での感動をお伝えしました。

鉄道事業の状況、地域活性化等に話が及んだ後で、三和さんから”故郷のために是非、津軽鉄道経営を手伝って欲しい”と強く要請され、2004年(平成16年)11月に取締役役に就任致しました。

取締役として、当分の間、経営のお手伝いの積りで居りましたところ、12月9日に開催された取締役会に於いて、三和社長が突然勇退を表明し、後任に私を指名したのです。

全く予想外の展開で、私は鉄道業については素人ですし、津軽鉄道の経営状態も良く知らず、心の準備もできていなかったのですが、祖父の平山為之助が初代社長であったこと、又映画「津軽の鉄道」を観るに至った偶然、その他奇縁とか運命的なものを感じ、代表取締役社長就任を受諾致しました。

社長に就任後、友人他多くの方々から心温まる励ましの言葉を賜りました。

感謝の意を込めまして、下記に学友、バドミントン（38年卒組）部員その他からいただいて当時のメールを抜粋してご紹介させていただきます。

☆

☆

☆

○地方鉄道会社は大変な様ですが、夢を持って地域社会を巻き込み、再建に頑張ってください。アイデアの一つでも出し、貴兄を応援したいと思っています。

○鉄道会社の再建の件ですが、商社出身の人は大体資金計画を中心に考えますが、現在、資金調達出来ても、本業が損益分岐点を超えない限り資金調達が必要になる。やはり、しっかりした本業の再建策を立案しそれを実行して行かない限り、資金不足の堂々巡りになるのではないのでしょうか？

○私からの現時点でのメッセージは、社長就任には疑問符付です。再建社長は大変な仕事です。まして、民間鉄道会社の再建！65歳という年齢と債務保証というリスクを考えれば？？？です。それでも、貴兄がやらねばならぬ、やるというのであれば、「津軽のじょっぱり」で頑張ってください。38年組が力になれば幸いです。

○歴史ある鉄道会社の社長とは意外の驚きでした。インターネットを見ると色々な企画列車があり、「ロマン」を感じます。自治体等からも補助金をどんどん引き出して観光客誘致の企画をホームページ等で紹介して活性化を図ってください。

○驚きました。すぐ「雪」と「高倉健」を思い出しました。ご縁とは言え、我々の仲間から、今になって鉄道会社の社長が誕生するとは……。過去の債務、現在の赤字対策等ご苦労があると思いますが、何よりも「故郷に堂々と貢献出来る仕事」に「誇りとロマン」がある様に感じます。地元の若手実業家、企業家の「熱意と知恵」の活用可能性は如何？

○いかにもロマンがあります。「老後の暇つぶし」とは言えない大仕事でしょうが、故郷への恩返しとしての設定で再建頑張ってください。「合理化」の名の下に首切りや減俸等を強行する様な手法ではなく、社員やお客様が喜ぶ形でやって頂きたいものです。38年組は無給の社外取締役(?)として大いに手助けしたいです。

また、学友、細野 宜昭氏（故人）からは、当社の運行する風鈴列車に掲げる短冊の短歌をいただきました。

君帰る 津軽の郷に待ちたるは ふるさと列車の存続問題

学友の 苦戦を聞いてゼミテンの 九百キロを訪ね励ます

昭和初期 祖父（等）の與せしローカル線 君やらずして再建なからむ

冬車 夏は自転車 そのうえに 少子化もありて見通し暗し

ことなげに 遊びし幼日語る君 重要文化財なる平山邸宅

久々の 議論懐かし年経れば 分からぬでもなし君の「じょっぱり」

来し方を 互（かたみ）に語る旧友に 老ゆるを嘆くはひとりとして居ず

☆

☆

☆

当社は1928年（昭和3年）に、「津軽北部開発と津軽半島環状鉄道の敷設促進」を目的に設立され、苦難の工事を経て、1930年（昭和5年）に津軽五所川原・津軽中里間20.7kmを全線開業しました。

16mm映画「津軽の鉄道」の制作者である栗山弘氏は、この映画の制作を通しての印象として“津軽の先人達の鉄道敷設への思いの強さは驚愕に値する”と話して居られます。その言葉通り、此の地方では、過去に幾つかの鉄道敷設のプロジェクトが企画され、無常にも実現を見ずに幻と化しています。

然し、その夢の崩壊・挫折にもめげずに、幾つかの鉄道敷設が実現し、幾多の苦勞の陰で、関係者の努力、地域のサポートにより、今なお生き永らえて居りますが、その一つが「津軽鉄道」です。

先人が苦心して開業させた、この鉄道は、86年の歴史を通して、地域の産業の発展、経済、教育、文化の振興、地域の近代化に少なからず寄与して来たものと考えて居ります。

乗客数のピークは1974年（昭和49年）の256万6千人で、それ以降は、年々漸減が続き、2015年度では、なんと28万人レベル迄落ち込んで居り、まさに危急存亡の危機と申せましょう。

2013年度から乗客数の減少もあり、当期利益は赤字が続いて苦戦して居ります。北海道新幹線開業に合わせて、2016年（平成28年）3月26日から新幹線の奥津軽いまべつ駅と当社の津軽中里駅を結ぶ連絡バスが運行されて居りますが、利用客数は伸びておらず現状の分析とその結果により集客に向けての早期対策が必要です。

☆

☆

☆

全線開業以来86年間の輸送人数累計は、2016年3月31日現在で99,603,508人となっており、あと396,492人で一億人となります。

先ずは早期に一億人を達成し、90周年に向けて、DMVの導入可能性の追及、空き駅舎の活用、また農業観光、農業の六次化等に挑戦して参りたいと考えて居ります。

地域と共に活かされ、報われる鉄道を目指して、皆様のご支援の程、宜しくお願ひ申し上げます。

澤田長二郎 氏



津軽鉄道社長

1940年青森県生まれ。  
63年一橋大学を卒業し、三菱商事に入社。  
タイ在住を経て82年に子会社の社長としてオーストラリアに赴任。  
94年本店資材本部長、96年関連会社社長に就任、翌年三菱商事を定年退職。  
2004年関連会社社長を退任し、青森県五所川原に帰郷。  
2004年12月津軽鉄道6代目社長に就任。  
現在東北鉄道協会会長、日本民営鉄道協会理事を務める。